

カナダ・インディアンと農業

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	新保, 満
巻/号	42号
掲載ページ	p. 119-121
発行年月	1977年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



カナダ・インディアンと農業

—日本農業を考えるための素材—

新 保 満

現在の日本の農民は将来に対して不安を持っているように思われる。その元凶は、政府が確固とした政策をもたず、大企業が日本農業を単に経済の一側面としてしか見ないためではなからうか。けれども、日本の農業は経済の視点のみからとらえられてよいものであろうか。日本農業の優れた面は簡単に見すごされてよいものであろうか。

私は長い間カナダにおいて日本の農業の現状を上のようにみていた。そして、経済の視点のみから日本農業の将来について積極的な展望をもつのはむずかしいのではないかと考えてきた。そこで、小論では、日本農業の将来を考えるための一つの素材として、一見まったく関係のないように見えるカナダ、インディアンの農業について、この事例から私達が何を学びうるかを考えてみたいと思う。

△ △ △

すべての人類が昔から農業に従事していた訳ではない。また、Rural というのは、Urban に対する概念であって、「農(漁)村」と同義語ではない。インディアンと農業の問題を考える時、この当然すぎるほど当然な事実を再確認しておく必要がある。

ゲアハード・レンスキーは、生産技術の発展段階によって人類社会を四つの発展段階にわけている¹⁾。第一は、自然に手を加えない「狩りょう採集」社会。白人と接触する以前のインディアンはその一例である。第二は、「鋏」を使う社会。東南アジアの山岳民族がその一例である。第三は、「鋤」を使う社会。現代のほとんどの後進国がこの段階にあり、つい半世紀位前まで、日本もこの段階から完全には脱却できないうでいた。第四は、財やサービスを機械力で生産する「産業社会」。現在の日本はこの段階に到達した。

過去百年の日本の歴史を反省すればすぐうなずけるように、ある発展段階から一つ上の段階への移行はその民族に大変な苦痛を強いる。私が過去十有余年調査しているカナダ・インディアンは、僅々百年足らずの間に、第一の段階から、第二の段階をとびこえて、いきなり第三の段階へ、そして戦後は第四の段階への適応を求められている。結論から先にのべると、インディアン達が、筆

舌に尽し難い苦痛をなめさせられた揚句に適応に失敗したのも、まことに無理もない話だと思われるのである²⁾。

以上の過程を順序だてて考えてみよう。カナダ大平原のインディアンは、バッファローという野牛に依存して生活していた。彼等の宗教からすれば、神が恵みとしてインディアンの前に動物(獲物)を送って下さる。インディアンはこの動物を殺して生きながらえてゆくのである。いわば、狩は神の恵みを再確認する「聖なる生業」であった。バッファローは、秋になると三三五五の小群に別れてカナダ北部の森林をさまよい、春になるとプレーリーに出て大群を組みつつ現在のアメリカ領まで南下する習癖があった。生活に必要なリソースの量が人間の生活サイクルを決めるから、インディアンにとって、冬は「勤労」の時であり、夏は「休息」の時であった。このパターンは白人が西進するまで悠久に続いて来たのである。

米国の西部が開かれる。政府は開拓者の生命財産を保護しなければならぬ。「誰から」保護するのか?インディアンの襲撃から……である。だが、後者にしてみれば、自分達の領地を侵略するものに対し、防衛戦争を試みるのは当然である。インディアンは果敢に闘った。業を煮やした政府は、インディアンの生活の基礎がバッファローである点に着目、この野牛を組織的に皆殺しにした。カナダのインディアンにしてみれば、彼等のあづかりしらぬ理由から、バッファローがかき消すように姿をかくし、生活の基礎が一挙に崩壊してしまった。1870年代初頭である。この時は、カナダでも西部を開こうとする矢先である。政府はすかさずインディアンと一連の条約を結んで彼等の土地をとり上げた。

インディアンは白人の設定する条件への適応を余儀なくされた。その条件とは、つまるところ「一定の土地(リザーヴ)に定着し、学校教育を受け、農耕によって生活しつつカナダ社会に同化せよ」というものである。この中一番切実だったのは、狩りょう民族が農耕民族に転換しなければならなかった一事である。第一に、(獲物がないから)狩を止めなければならぬ。日本人のように宗教を軽くみないインディアンは、彼等の神にそむくのを拒んだ。獲物は少なくとも神はいまし給う。しか

し農耕するというのは神の恵み以外の方法で生きてゆくことに外ならない。インディアンは宗教的理由から農耕に手を出さなかった。第二に、カナダは北国で、プレーリーの耕作は5月から8月末の4ヶ月間にほぼ限られる。冬は大地は凍って家畜を飼う以外に何もすることがない。つまり、インディアンの伝統的な生活サイクルの丁度逆の生活サイクルを強いられる。第三に、昔インディアンが狩に必要とした土地の約25分の1の土地にとじこめられたのである。鼻がつかえて息がつまりそうになった。この心理的挫折感がインディアンの「再建」を遅らせた。第四に、農耕の伝統をもたないインディアンにとって、農業技術・農場経営の手腕はゼロに近い。たとえ彼等が農耕を始めたとしても、「土族の商法」以上に手ひどい失敗をするであろうことは容易に理解できる。

ところが、以上に加えて、人口稠密な日本にいる人々には理解困難な条件がもう1つあった。日本の土地利用は「集約的」で、都市でなければ農村か山である。そして、山には人間が住まないからRuralではない。だから、Ruralと「農村」とはほとんど同義語である。これにひきかえ、インディアンは「狩りょう」民族であったから、動物のいる所ならどこでも——草原・沼地・森林・永久凍土帯のどこにでも住んでいる。これらの地域もまたRuralなのである。カナダのインディアンはRural Peopleだが、彼等は必ずしも「農耕可能地」に住んでいるとは限らない。事実、「農耕可能地」にあるリザーヴは全くの偶然であった。一九世紀後半にリザーヴを選定する時、彼等は動物の居そうな所を選んだから、リザーヴが後になって「農耕可能地」と判明したグループは幸運だった……のである。つまり、動物が完全にいなくなったらいしものにならない土地に住んでいる人々が大部分なのである。

その農業上使えものにならないリザーヴも、例えば石油か天然ガスでも産出すれば話は別だが、彼等は個人の自律性(self-autonomy)を尊ぶから他人と協調できず、産業もおこらず、結局は生活保護世帯に転落してゆく。

(インディアンは、採算のとれる見通しさえあれば、連邦政府から金をかりることができる。)リザーヴの生活にあきたらぬ青年達は、都市に流出して貧民窟の拡大に貢献する。外の農耕可能なリザーヴにいて農業に精出したインディアンの話は、私は末だかつて耳にしたことがない。農耕不可能なリザーヴのインディアン達は、だから、農業には無縁なのである。

では農耕可能なリザーヴにいる人々は農業に精を出すか。前にのべた諸条件からうかがわれるように、インディアンの農業への意欲は、1950年代末まで極めて限られていた。1960年代後半になると、インディアンの間に民

族的自覚が高まりつつあり(これを『パン・インディアニズム』という)、指導者達は何とかしてリザーヴの経済を進展させ、生活保護世帯の境遇から抜け出そうと志向している。

インディアンのリザーヴではどのような経済発展が可能であろうか。さしあたって考えられるのは商業の発達である。インディアンはリザーヴにほとんど店をもたず、手に入れた金は一銭のこらず白人の店で使う。もし、インディアンがリザーヴで店をもつなら彼らの金はお互いの経済を向上させるに役立つであろう……。確かにその通りだが、これがむずかしい。「もてる物はお互いに領ちあう」という「狩りょう採集」社会共通の文化価値がリザーヴの商業発達をさまたげるのである。誰かがリザーヴで店を開けば、外の者は皆信用借りして決して支払う気づかいはないから、必ず倒産する。1975年に私は2つの地域でインディアンの再調査をした。この時点で白人の村にインディアンの経営する店(資本は政府が出した)が5店あった。4ヶ月以内にこの中の4つは倒産した。これらの店がもしリザーヴにあったとしたら、もっと短命であったに相違ない。

工場をつくるのも1つの経済発展の方法である。リザーヴには小規模な工場を作る位の土地はある大部分は定職をもたない人々だから、非熟練労働力はある。必要数の熟練工もいる。見込みさえあれば政府が金を出してくれる。私の調査した六つのリザーヴの中、1つにプレハブ工場が作られた。うまくいったか。余り感心できない操業であった。原因は3つある。第一に、生産の計画・管理と工場の運営がまずかった。生産が予定期間に間に合わないのである。それに出来上がったものが少々質がよくない。運営がまずいので各部門の足並みがそろわない。だから、良い製品を約束した期日までに納めることがむずかしい。第二に、上に関連するのだが、労働力の質がよくない。決まった時間に工場で精一杯働く……という習慣がないので、生産がどんどん遅れる。第三に、マーケットが限られる。質のよくない製品が期日を過ぎてから届けられるのでは、一般社会からはソッポを向かれる。つまり、インディアンしかお客がない。インディアンの間には嫉妬があるから、外のバンドの製品を買いしぶる。このプレハブ工場は、スタートして間もなく開店休業の状態になった(1976年に州政府の肩入れて再開した)。

稀なケースだが、リザーヴの地形を利用してゴルフ・コースやスキー・リゾートを運営することも可能である。私の調査したリザーヴのあるものは、そうした稀有な例であった。政府が莫大な資本を投下して3つの隣接しているリザーヴを進展させようとした。1960年代か

ら、政府は何期にもわけて援助を行ない、少しずつ設備をととのえていった。そうして1977年3月で援助を打ち切った。しかし、すでにこの前から問題が表面化して来ていた。接客業の訓練が足りないから、客の応待が大変ぶっきら棒で不快感を与える。仕事へのコミットメントがないから、例えば便所等の掃除がゆきとどかなかつたり、芝の手入れがひどくわるい。会計がルーズなため、いつも金が足りない。客はへるし、思ったほどの収入は上らぬし……という状態であった(むしろ欠損を出している)と見た方があっているであろう)。

以上の諸産業がうまくゆかないとなれば、もう一度農業を見直さざるをえない。何故なら、農耕可耕地では既に土地というリソースがあるので一番可能性のありそうな経済発展の道だからである。インディアン自身、この100年ばかり農耕文化への適応に失敗した事実を認めている。今度は少し肚をすえてかからねばならない。インディアンの指導者達が考えているモデルを私の用語で要約すると次のようになる。「今までは政府はリソースを提供してくれたけれどもインディアンの誇りをふみにじったからうまくゆかなかつた。もし、インディアンが誇りをもって仕事をすれば上手くゆくのではあるまいか」。

インディアンが誇りを回復するにはどうすればよいか。第一に、自分達の言葉を取り戻さねばならない。北のリザーヴはそうでもないが、南の連中はほとんど英語がマザー・タングになっている。彼等の間には、もう一度自分達の言葉を習得しようとする動きが顕著に見られる。第二に、自分達の宗教を取り戻す。宣教師達の努力と政府の奨励によって、96%位のインディアンは(名目的には)キリスト教徒である。けれども、この10年ばかり、インディアンは自分達の宗教を復活させようと努力しつつある。第三に、インディアンの連帯をつよめる。そのために、リザーヴ間のスポーツの催しや様々な会の催しが行われ、多数の参会者を見るに至っている。宗教的な祭りにしてもそうである。十数年前迄、リザーヴ間の交渉が極めて少なかった事実を想起す時、隔世の感がある。私の印象では、これらのプログラムは成功し、たしかにインディアンは誇りを取り戻しつつあるように思う。

では、誇りを取り戻したインディアンは農業に成功したか。この点を論ずる前に3つの事実読者の注意を向けて頂く。第一に、小論の初めに記したようにインディアンの伝統的生活サイクルは、農耕民族のそれとは逆で、冬が「働く時」、夏は「休息の時」であった。第二に、人類の何れの社会においても、祭りは「休息の時」に集中する傾向がある(日本の祭りは春仕事の前が夏の農閑期か収穫後の何れかである)。第三に、カナダの大

平原の耕種農業は五月に播種し8月中下旬に収穫する。

以上を念頭においてインディアンの農業を見てみよう。インディアン達は指導者の掛け声に励まされて4月から野に出てトラクターで大地を耕し始める。5月には播種。6月も野良で働く。ここまでは私自身の目でたしかめてある。けれども、7月中旬から8月下旬にかけて、各リザーヴでは日をずらせて「パウアウ」という祭りを行う。そして州内の——時には隣州のインディアンにも参加を呼びかける。若者・壮年者達は車でパウアウに出かけ、インディアンの連帯感を強め合うのである。だが、畑の麦は成熟しきっている。特定の時期に刈り取ってしまわないと収穫はゼロに近くなる。政府の役人は必死になってインディアンを畑につれ戻そうとするが、それができないのである。それならば、祭の日時を多少変更すればよいのだが、それを拒否する。こうして、インディアンは誇りを取り戻し、政府は引きつづきリソースを提供しているが、農業はうまくゆかないままなのである。文化というのは大きな力をもつものなのである。

△ △ △

有史以来大地を耕してきた日本民族は「人間が農耕をするのは自然だ」と考えているのではあるまいか。しかし、人類のすべてが農耕の歴史をもっている訳ではない。農耕の伝統をもつ民族も、地形・気象³⁾と文化とによって大きく異なるのである。現在の一見きびしい内外の状況の中で日本人が日本農業の将来を考える時、単に日本の農業のみに立脚した議論を展開するのでは自信を喪失するのではあるまいか。けれども、農耕自体が既に大変な文化的遺産(cultural heritage)なのである。のみならず、日本の農業は欧米農業の常識に逆行し、小農制を維持しつつ農業を発展させた。私は、余りに「先進国」のみを「模範」として考える発想は、日本農業の独自性を見失わせ、自信を喪わせるのではないかと恐れる。人類の農業の形態は地形・気象のみではなく、文化によっても大きく変ることを知る時、日本の農民は彼らの文化的遺産を活かして独自の未来を礎く可能性に思い至るのではあるまいか⁴⁾。もし、文化の差に視点をすえたインディアンの農業についての小論が、そうした方向に何らかの知見を提供したとするならば、私の倖せはこれに過ぐるものはない。

- 1) Lenski, Gerhard, *Human Societies*, New York: McGraw-Hill, 1970.
- 2) 新保 満, 『カナダ・インディアン——滅びゆく少数民族』, 三省堂, 1968.
- 3) 飯沼二郎, 『日本農業の再発見——歴史と風土から』, NHK, 1975.
- 4) 「文化的遺産」については新保 満, 『日本の移民一日系カナダ人に見られた排斥と適応』, 評論社, 1977.

(カナダ・ウオーターラー大学)